

再帰代名詞の省略と意味論的研究(2)

—The Omission of Reflexive Pronouns and Semantic Study—

井上 卓

本稿は、No.61に掲載された「再帰代名詞の省略と意味論的研究(1)」の続きである。後半となる今回では、再帰代名詞省略に関する通時的研究と検証も加え、考察していきたいと思う。お手持ちのNo.61と合わせて読んでいただければ幸いである。

5. 通時的研究

先ず、3で挙げた多くの例文から、単純動詞形と refl. を伴った形の間には、形態的だけでなく、意味論的にかなり顕著な違いがあることがわかった。Quirk et al. (1985)の分類した9つの準再帰動詞のうち、adjust (oneself) to, identify (oneself) with, worry (oneself)を除く6つで、意味の相違が生じることも本研究でわかった。このことから、refl. が省かれても、殆どあるいは少しも意味が変わらないという Quirk et al. の説明は必ずしも妥当でないように思える。dress や wash といった動詞は、Kemmer (1993)が言う grooming か body care の身繕い表現が多く、行為が自分自身に行われるので refl. が省かれがちだが、再帰形を伴った形との間に意味の相違があることもわかった。こうした意味の区別は、Jespersen や Poutsma が指摘しているが、Late Modern English 期になって生じたのだろうか、という疑問が出てくる。次に、dress, wash, shave の再帰形に関して、ModE

Coll. [The Modern English Collection]で語句検索をしてみた(ModE Coll. はAD1500-1900年代始めまでの資料を集めたものである)：

表3 dress, wash, shave の用例数頻度

	EModE 1500-1699	LModE 1700-1900	PE 1900-1999
dress oneself	3	77	34
wash oneself	1	30	14
shave oneself	∅	∅	14

表3から、dress と wash は、LModE に入って初めて refl. を伴う形を一気に増やし、shave + oneself は、PE 期に入って、出現かつ頻度を増やしたことがわかる。このことは、LModE 以降、これらの動詞について、単純動詞形と refl. を伴う形の2形態が競合したこと、また、この形態間の意味の区別も生じた可能性を示す。Peitsara は、ME から ModE までの再帰構造戦略の発達について、Helsinki Corpus [語数 110 万]を用いて研究している。次に、表4、表5の Peitsara (1997)の研究を見てみたい：

表4 Reflexive strategies with verbs of self-care and equipment : numbers of instances with the simple strategy and the SELF-strategy. Peitsara (1997 : 333)

Strategy	ME1 1150- 1250	ME2 1250- 1350	ME3 1350- 1420	ME4 1420- 1500	EModE1 1500- 1570	EModE2 1570- 1640	EModE3 1640- 1710	Total
simple	4	11	6	7	6	5		39
SELF	2		4	2	7	9	6	30
Total	6	11	10	9	13	14	6	69

表5 Reflexive strategies in Middle and Early Modern English : numbers of instances

Peitsara (1997 : 288)

Strategy	ME1 1150- 1250	ME2 1250- 1350	ME3 1350- 1420	ME4 1420- 1500	EModE1 1500- 1570	EModE2 1570- 1640	EModE3 1640- 1710	Total
simple	76	129	234	236	70	30	4	779
SELF	75	16	73	92	140	219	206	821
Total	151	145	307	328	210	249	210	1600

表4から、simple形がMEである程度優勢だったが、1600年ごろから次第に減少、反対にSELF形[vt.+refl.]が、優勢になったことがわかる。Peitsaraは、simple形の中でもwarmやwash等の動詞が廃れず残っていくと述べている。また表5から、MEの4分の3の時期に優勢だったsimple形が、16世紀に入り完全に逆転するのがわかる。Peitsaraが研究の対象とした動詞は、dress, washといった種類の動詞も含んでいるので、筆者が行った表3の結果とも合わせ考えると、動詞全般でSELF形がsimple形に取って代わっていったことが明らかになった。

以上に述べたことから、dress, wash等のself-directed的動詞は、1600年ごろのEModEからLModEにかけてSELF-strategyを強めたことがわかった。これは、refl.省略とは反対とも思える傾向で、self-directed的動詞だけでなく動詞全般についても、the light formとthe heavy form間の意味的な区別も、この時期に生じてきたと思える。このことに関連して、Visser, F. (1970 : 146)は次のように述べている：

As appears from the subjoined evidence it is also wrong to single out the Present Day period as characterized by the tendency to 'drop' the reflexive complement. *Wash, oversleep, miscarry,*

dress, compare, bathe, for instance, are already used without reflexive object in Middle English. Yet it is true that with some verbs... Pres. D. English shows a decided preference for the shorter construction, and that in some cases, e.g. with to qualify and to behave, a difference in meaning between the two practices has developed. (下線は筆者によるもの)

6. 意味的特質と検証

次に、表2が示すように、dressやwashといった種類の動詞を含めて、the heavy formとthe light formという2形態間に顕著な意味的特質の相違が存在することが明らかになった。この原因は何か2点考えてみたい。

まず第1に、前者の特質のexertion, intentionality, dynamicは、すべてvolition(意志作用)の色々な側面と考えられる。このvolitionとexertionという特質の存在については、Jespersen(1914, 1933)やSticha(1982)が指摘している。volitionalityは、他動性と強い関係がある。Hopper & Thompson(1980 : 251)によれば、transitivityとは、伝統的に、同一節内で活動がan agentからa patientに移されるという特質で、2人のparticipantsを必然的に含むという。Hopper & Thompsonは、表6のように、他動性のプロトタイプの特質を説明している：

表6 他動性の基準 Hopper & Thompson (1980 : 252)

		(他動性が)高い	(他動性が)低い
A	Participants	2 or more participants, A and O.	1 participant
B	Kinesis	action	non-action
C	Aspect	telic	atelic

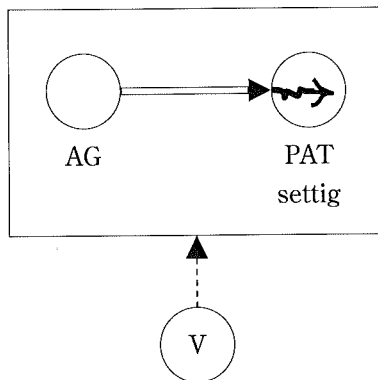
D	Punctuality	punctual	non-punctual
E	Volitionality	volitional	non-volitional
F	Affirmation	affirmative	negative
G	Mode	realis	irrealis
H	Agency	A high in potency	A low in potency
I	Affectedness of O	O totally affected	O not affected
J	Individuation of O	O highly individuated	O non-individuated

表6で、「他動性が高い」のは、ある event(事態)に2人かそれ以上の参加者がいる場合で、活動(action)がある participant(agent)から別の participant(patient)に移される。この場合、動作主がわざと働きかけて被動作主に影響を及ぼすと、volitional(意志が働いた)であるという。一方、「他動性が低い」場合、参加者は1人だけで、活動の移行は行われず、各項目は、「他動性が高い」の逆になる。本研究での refl. を伴う the heavy form は、表6の「他動性が高い」項目に当てはまり、refl. を伴わない the light form は、「他動性が低い」に当てはまる。また、Bに Kinesis(動作性)があるように、動作主が被動作主の状態に移動変化することは、動作の他動性が高い現れだと考えられる。例えば、(22) a の He hid himself into... で、動作主

が身体を隠した状態に変化移動している。これは他動性が高く、verbal process も表れ dynamic (動的)な表現になる。一方、(22) b の He hid behind... のような単純形は、動詞の語彙的意味を表すだけで、stative(静的)である。このように、一般に、再帰形は dynamic で、単純形は stative である。同様のことが、(23) a と(23) b、(24) a と(24) b、(25) a と(25) b や、他の多くの例文について当てはまる。以上に述べたように、表2の the heavy form の特質 volition, exertion, intentionality, dynamic は、表6の他動性(が高い時)の多くの基準項目に合致し、検証されたと思う。

他動性に関して、Langacker(1991:285)は、他動的事態のプロトタイプを、次のように図で示している：

表7 Canonical Event Model



(注) AGは動作主、PATは被動作主。Vは観察者(viewer)、つまり話者で、舞台上で起きている事態を客席から観察している。(注は筆者によるもの)

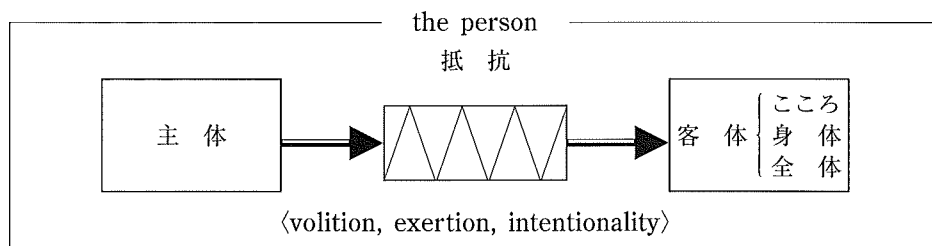
表7のように、他動的事態には、2つ以上の participants が含まれる。その1つの動作主が被動作主にエネルギーを伝えて(二重線矢印)、その結果、動作主は状態の変化を起こす(波状矢印)。Horita(1995:152)によれば、動作主は原型的に人間で、エネルギーを他の参加者に伝えることによって、volitionally に身体的活動を起こす。被動作主は、原型的に無生物で、外部的に起こされた身体的接触

から伝えられるエネルギーを吸収し状態の内部変化を起こすことになる、という。このエネルギーの受け渡しの流れは、Langackerが action chain と名付け、一方的・非対称的な連鎖関係である。再帰構造は、このような action chain、つまり volitional なエネルギーの受け渡し関係を持つので、観察者(話し手)には、volition が感じられるのである。

第2に、2形態間の意味の相違を、Lakoff等の認知的観点から考えてみたい。Lakoff (1996)は、再帰代名詞の解釈で、自己を2つの部分(SubjectとSelf)に分けて概念化する。例えば、I wash myselfの文で、IがSubject(主体)、myselfがSelf(客体)となる。Subjectは、自己の主観的な面で意識・意志・判断の中枢であり、Selfは、客観的な面、つまり信念・計画・情熱・記憶等という人の他の面で、身体や感情に当たる。SubjectはSelfの内部にあり、意識の正常な状態では、SubjectがSelfをコントロールする。4.4で、Kemmer (1993)が、dress, washといったbody careの動詞に関して、「身体へのコントロールが幾らか欠如している状態で、the heavy formが現れる理由は、主語と目的語がたった1つの指示対象実体の異なる面として見なされるから」と述べているの

は、Lakoff等の考えと共通点が多い。Lakoffの観点に基づいて、本研究で挙げた例を幾つか見てみたい。例えば、(7)a, (12)a, (22)aという再帰形で、主体(動作主)のwe, she, heは、それぞれ客体のourselves, herself, himselfを意図的にコントロールする(エネルギーを伝える)。また、本来、再帰形は、主語が、自分自身(oneself)に、他人(異質のもの)に対するように働きかける構造なので、自己をコントロールする過程で何らかの精神的物理的な抵抗が予想され、しばしばvolitionを働かす必要が出てくる。客体(自分自身)に当たるoneselfは、本研究の例文を見るとわかるように、大きく、こころ、身体、(こころと身体を合わせた)ひと全体に分類される。以上のように、the heavy formでvolitionという意味特性が生じやすい理由を考えてきたが、これを次のように図式化してみたい：

表8 再帰形でvolitionの意味合いが生ずる仕組み



7. 結論

現代英語で煩わしい refl. を省く傾向がある中、dress, wash等のself-directed的動詞は、むしろsimple形が廃れ、再帰構造戦略がLModEから現代にかけて優勢化していること、またgroomingやself-care動詞を含めた動詞全般で、同様のことが言えることが明らかになった。Simple形と再帰形という2形態間に、かなり明確な意味的相違が存在する傾向が検証された。再帰形[vt.+refl.]には、特質である他動性が様々な意味合いで現れる。これから、refl.を省いても殆どあるいは少しも意味が変わらないというQuirk et al.(1985)のsemi-reflexiveの説明は、意味論的な観点から欠けていると言える。再帰表現は、その意味的特性のため、Schibsbye(1965)の言うように、単純動詞形よりも内容が豊かで描写的であると思われる。2形態間に意味的相違が生じる原因については、他動性

や主体・客体といった認知的観点からの考察である程度明らかになった。通時的に、現代の再帰構造戦略の優勢は、2形態の共存を意味するが、結論的に、2つの形の使い分けは、主体と客体といった、話し手の自己への認知活動が基になり、いずれかのパターンが選ばれ、意味合いが決まってくると思われる。ネイティブは、この使い分けを直感的に行っていると考えられる。

今後の課題として、2形態を対比しつつ、より多くの例文収集に努め、意味分析をもっと行うこと、そして意味と統語的特徴の関係を研究する必要性が挙げられる。

8. 教育的示唆

日本人英語学習者にとって再帰代名詞は馴染みにくいものの1つである。単純動詞形と再帰形という2形態間の意味的特質を認識し使い分けに慣れるこ

とは、ネイティブの語感に近づき自然な英語表現の習得に結びつくと思われる。

References

- Hopper, P.J. and S. Thompson. (1980) "Transitivity in grammar and discourse." *Language*. 56:251-299.
- Horita, Yuko. (1995) "A Cognitive Study of Resultative Constructions in English." *English Linguistics* 12 : 147-172.
- Jespersen, Otto. (1914) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Northampton : John Dickens and Co Ltd.
- Jespersen, Otto. (1933) *Essentials of English Grammar*. London : George Allen & Unwin Ltd.
- Kemmer, Suzanne. (1993) *The Middle Voice*. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.
- Langacker, Ronald, W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2 : *Descriptive Application*. Stanford : Stanford University Press.
- Peitsara, Kirsti. (1997) "The development of reflexive strategies in English." *Grammaticalization at Work*, ed. By Matti Rissanen, Merja, Kytö and Kirsi Heikkinen, 277-370. Berlin : Mouton deGruyter.
- Poutsma, H. (1916) *A grammar of late modern English*. Groningen : P. Noordhoff.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Schibsbye, K. (1965) *A Modern English Grammar*. London : Oxford University Press.
- Sticha, Frantisek. (1982) "On Reflexive Verbs in English" *Philologica Pragensia*, 25, 3, 173-181.
- Visser, F. (1970) *A historical syntax of the English language*. Netherlands : Leiden : Brill.

Dictionaries

- COBUILD⁵. *Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*. (2006) Glasgow : HarperCollins.
- LAAD. *Longman Advanced American Dictionary*. (2000) Longman.
- LDOCE⁴. *Longman Dictionary of Contemporary English*. Longman.
- OALD⁷. *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. (2005)
- RHD². *Shogakukan Random House Dictionary*. (1993) 小学館
- 『アドバンストフェイバリット英和辞典 初版』 (2002) 東京書籍
- 『ウィズダム英和辞典 初版』 (2003) 三省堂
- 『新英和辞典 第5版 初版』 (1985) 研究社
- 『ユースプログレッシブ英和辞典 初版』 (2004) 小学館
- その他のデータ
- BNC (British National Corpus)
- CB (Cheeseburger by Bob Greene)
- LB (Lost Boy by Dave Pelzer)
- MND (A Man Named Dave by Dave Pelzer)
- The Modern English Collection

(関西学院大学非常勤講師)